

2020年(A年) 三位一体(6/7)～年間第14主日(7/5)のみことばの典礼の構成と内容

5/31(日)	聖霊降臨(祭)	ヨハネ 20・19-23	父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。聖霊を受けなさい	ヨハネ福音書における聖霊降臨の概念とその意味
6/7(日)	三位一体(祭)	ヨハネ 3・16-18	神が御子を遣わされたのは御子によって世が救われるためである	人間を救おうとする三位一体の神
6/14(日)	キリストの聖体 ²⁸ (祭)	ヨハネ 6・51-58	私の肉はまことの食べ物、私の血はまことの飲み物である	ヨハネの聖体論
6/19(金)	イエスのみ心 ²⁹ (祭)	マタイ 11・25-30	わたしは柔和で謙遜な者である	イエスの御心とイエスへの追従
6/21(日)	年間第12主日	マタイ 10・26-33	体を殺す者どもを恐れるな	“恐れるな”―何をおそれるべき?
6/28(日)	年間第13主日	マタイ 10・37-42	自分の十字架を担ってわたしに従わない者はわたしにふさわしくない。あなたがたを受け入れる人はわたしを受け入れる	イエスに従うこと、弟子としての条件と真の報い
7/5(日)	年間第14主日	マタイ 11・25-30	わたしは柔和で謙遜な者である	

【典礼的背景】

復活節を締めくくる最後の日である聖霊降臨祭(5/31)に続いて、6月の典礼歴(教会のカレンダー)は、三位一体(6/7)、キリストの聖体(6/14)、イエスのみ心(6/19)、洗礼者ヨハネの誕生(6/24)、使徒聖ペトロと聖パウロ(6/29)などの大きな祭日が続く。四旬節と復活節で中断された年間、聖霊降臨直後の月曜日から再開するが、その日は「教会の母聖マリア」の記念日として2018年から制定された。十字架の前に立っていたマリア(ヨハネ 19:25～)はイエスのわき腹から流れ出た血(聖体の秘跡を象徴)と水(洗礼の秘跡を象徴)の証人である。教会を形作る秘跡が、自身の命を完全に奉獻し尽くしたイエスの体から生れ出たその場にいたこと、そして、教会の誕生日とされる聖霊降臨の時も弟子たちと共に祈っていたこと、これらの箇所はマリアが母とし

て教会とそのすべての子らを導くことを物語っている。三位一体の祭日、キリストの聖体の祭日、イエスのみ心の祭日は、キリストによる救いの出来事から直接導き出されたものというより、神学や教義や信心が発展していく中で導入されたものと考えられることができるため、「理念の祝日」、「教理の祝日」などと呼ばれる。そのため、いずれも一般ローマ暦に採用された年代は主の祝祭日の中では新しく、三位一体の祭日は1334年、キリストの聖体の祭日は1264年である。教会は伝統的に6月を“イエスのみ心の月として、イエスのみ心に対する信心を奨励してきた。み心の信心は古く中世期にまでさかのぼるが、全教会の祝日として定められたのは1856年。洗礼者ヨハネは、キリストと聖母を除いてその誕生を祝う唯一の聖人である。6月を締めくくる祭日は教会の礎を築いた使徒聖ペトロと聖パウロである。

²⁸ この祭日の名称は伝統的に「キリストの至聖なるからだの祝日(Festum Ss. Corporis Christi)」で、ラテン語は「コルプス・クリスティ(Corpus Christi)」。現在の一般ローマ暦では「キリストの至聖なるからだと血の祭日(Ss. mi Corporis et Sanguinis Christi Sollemnitatis)」と呼ばれキリストの御血についての内容も含めた名称となっている。かつての典礼暦には「キリストの御血の祝日」もあった。これは教皇ピオ9世(在位1846～1878年)が1849年に定めた祝日で、7月1日に祝われていた。1969年の典礼暦の改定では、キリストの御からだと御血を合わせて祝うこととし、上記のような名称になった。日本では、「聖体」ということばがキリストの御からだと御血の両方を表しているため「キリストの聖体」という名称を採用している。現在の一般ローマ暦では、キリストの聖体の祭日は三位一体の主日後の木曜日と定められているが、日本のようにこの日が守るべき祝日ではない場合、三位一体の主日直後の主日に移動して祝う。

²⁹ この祭日はイエスのみ心に対する信心に由来するが、この信心は、イエスの内から流れ出る生きた水(ヨハネ 7:37-38)や刺し貫かれたイエスのわき腹から流れ出た血と水(同19:34)に基づいて、イエスのみ心をすべての人の救いのためにいのちをささげたキリストの愛の象徴として黙想するもので、14～15世紀の神秘主義の影響もある。み心の信心は16世紀にはイエズス会によって奨励され、オラトリオ会司祭のヨハネ・ユード(1601年～1680年)は1672年に司教の許可を得て自らの共同体でイエスのみ心を祝った。また、マルガリタ・マリア・アラコク(1647年～1690年)は、1673年から1675年に私的啓示を受け、イエスのみ心の信心を広めた。教会としては、1765年に教皇クレメンツ13世(在位1758～1769年)がポーランドの司教の要請に応じて最初に公認し、教皇ピオ9世(在位1846～1878年)が1856年に、全世界で祝うことを定めた。

6/7【三位一体の祭日（聖霊降臨後第1主日）】ヨハネ 3・16-18

ヨハネ福音書の中で4回しか使用されていない“独り子”という用語が2回出てくる大切な箇所。子をとおして示された父の愛：「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るため(16節)」はヨハネが強調して描きたい神の救いの力強いメッセージである。一番大事な自分の独り子を与えたことは、人間の親が最愛の子を差し出すことを通して考えうる部分もあるが、父なる神と子である神は一体、唯一の神なので、世を救うために神はご自身を世に差し出したと言える。ヨハネ福音書が書かれた目的は20:31の「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである」。

6/14【キリストの聖体（聖霊降臨後第2主日）】ヨハネ 6・51-58

ヨハネ福音書は13～17章の5つの章を最後の晩餐の席について書いておきながら、ご聖体の秘跡制定（「パンを取り私の体、ぶどう酒を取り私の血…」）のことを記していない。四福音書中最後に記されたとされるヨハネがこれを書いていないのは聖書学上の大きな謎であるが、ヨハネは聖体論を6章(5千人にパンを増やして与える奇跡とその後の論争)において凝縮させている。51～58節は、ヨハネ福音書の読者と、キリスト者である彼らが実際に対峙しているユダヤ人たちへの**ミサの説明**として読むことができる。53節の「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければあなたたちのうちに命はない…」と言う表現は、血を神聖なものとみなし、その中に命があると考えられていた当時のユダヤ人に対してはもちろん、現代を生きる私たちキリスト者にとってもかなり原理主義的な感じが残る。しかし、「イエスの肉を食べその血を飲むこと(つまりミサにおける聖体拝領)をしなければ命がない」を滅びの宣告として排他的に読むことは安易にできない。ここには、パンの形態のイエスの体信じず受け入れない者が滅ぶという断罪的ニュアンスよりも、当時のキリスト者たちのご聖体への熱い信仰をベースに読むべきであろう。つまり、現代のキリスト者にとって問いとなるのは、「ご聖体によって肉体的にも霊的にも、真の意味で生かされているという信仰の感覚が本当にあるか」ということである。ヨハネ福音書が書かれた当時のキリスト者たちが、周りのユダヤ人たちに対して公に宣言していたことを私たちも宣言できるほどその信仰があるかどうか問われていると言える。

6/19(金)【イエスのみ心(聖霊降臨後第2主日後の金曜日)】マタイ 11・25-30

※ 別紙参照 福音の箇所は、7/5(日)【年間第14主日】と同じ。

6/21【年間第12主日】マタイ 10・26-33

この福音の箇所キーワードとなっているのは26, 28, 31節の「恐れるな」と

いう言葉である。このキーワードをもとに、別々に話されたイエスの言葉をマタイが編集したと一般的に解されている。「何を本当におそれるべきか」というイエスのメッセージの核心に触れる問いがある。「恐れる」と「畏れる」の違いから読み解くと、「恐れなくてよいもの」と「本当に恐れ敬って」生きるべき方が明らかになってくる。これがはっきりしたとき、真のキリスト者として生きる道筋が示される。「恐れ」に振り回されずに、今、本当に何が起きているのか、自分にできることは何かを見つめることが大切である。

6/24(水)洗礼者ヨハネの誕生(祭)ルカ 1・57-66, 80節

この日付は、ルカ1・36の基づき、救い主の先駆者としてその到来を準備した洗礼者ヨハネがイエス誕生の6か月前に誕生したことによる。

6/28【年間第13主日】マタイ 10・37-42

38節の「自分の十字架を担ってわたしに従わない者はわたしにふさわしくない」はまだしも、37節の「わたしよりも父や母、息子や娘を愛する者はわたしにふさわしくない」はかなり原理主義的ニュアンスを帯びている。イエスの弟子になる条件として、「十字架を担え」に加え「愛する家族を捨てろ」という宗教の教えは現代人には敬遠されがちでもあろう。しかし、「イエスが家族間の愛を否定した」という解釈は成り立たない。ユダヤ教の最高規定である律法の頂点に立つ十戒の第4戒に「父母を敬う」とあり、これは家族間の年長者のみならず、特に教育において権限を有しているすべての者を敬うことが含まれている。また、この箇所の解釈とメッセージの解読のためには、福音書が書かれた時代の**“迫害”**の背景を踏まえなければならない。キリスト者となるために、家族との決別を余儀なくされた初期キリスト信者は多数いたのである。ただし、イエスの教えが真の福音である以上、それは時代を超えてすべての人を救う真理の言葉であるから、事実上の迫害を生きていない私たちにも、この言葉は意味を持つはずである。「(他一切を捨てて)イエスのみを選ばなければならない時はいつか」という質問がいかにももしれない。極端ではあるがわかりやすいのは“死”の瞬間か。愛する家族がいても、人は一人で永遠の世界へ旅立っていかなければならないし、そのとき頼れるのは家族でも自分自身でもない。このような考え方を軸に、この世で一番大切な人である家族よりも、イエスという(家族以上)最も大切な方を選ぶことが救いに繋がるという見方(読み方)が段階的にできれば、解釈も深く、メッセージも豊かになろう。

6/29(月)【使徒聖ペトロと聖パウロ(祭)】マタイ 16・13-19

ペトロはローマの司教(初代教皇)として33年生きた。パウロはキリストの時代にタルソ(現トルコ)に生まれ、ファリサイ派として育ち、徹底的にキリスト教徒を迫害した(使9:4参照)が回心後、異邦人の使徒として宣教し初代教会を作り上げた。